

## 『經典餘師』について

井 出 元

### 目次

- 一、はじめに
- 二、『經典餘師』について
- 三、『經典餘師』(「論語」)を読む
- 四、まとめ

### 『經典餘師』について

『經典餘師』という書に出会ったのは東北大学在学中であった。当時は専ら『周易』を講読していたが、日本人による解釈はないかと捜していた。全編漢字と仮名とが、流麗な筆で書かれた『經典餘師』は、万葉仮名の不得意な私にとって、白文よりも読解に困難であった。学生時代に一読した時は、あくまで『周易』の「正義」を読むための余興のような、軽い気持ちであった。しかし、読み終えて『易』という難解な書が一段と身近になったことは確かである。今回、改めて『餘師』そのものについて考察することになり、序文より精読してみると、本書のもつ歴史的な意味を感じざるを得ない。中国の伝統的な注疏の学と比較すれば、その嚴密性という点からは多少の遜色はあるものの、その欠を補うだけの特色を本書は保有していると考えられる。その特色を思いつい

たのは、二宮尊徳が『經典餘師』を二十代で読破し、その処世の支えとしていた事実を知ったことに起因する。いかえれば、私は尊徳を通して『經典餘師』の意義を改めて知ったのである。

さて、儒教の伝来は遠く四世紀にまでさかのぼることができるが、当初日本では、儒教は『論語』などを通して文字言語の源泉として学ばれた。当時の日本人は既に固有の言葉を持ち、固有の神々を信仰し、部族連合の祭祀国家を営んでいた。そこへ最初に伝えられたのが『論語』であった。日本人はこれによってまず文字を覚え、道徳の名を知り、さらに家や社会、そして国家維持の方法を学んだのである。

江戸時代には、新儒教とも言うべき朱子学が日本に伝来し、徳川幕府の政策の理論的支柱として君臨し、封建的國家の体制を築き上げる枠組みを提示した。それは、一方において日本の近代化を遅らせる一大原因となったのであるが、他方においては、日本の近代化の前提ともいえるべき、日本人の精神的独立の基礎を築いたものであったことを忘れてはならない。藤原惺窩が「我久しく釋氏に従事す。しかれども心に疑いあり。聖賢の書を読んで、信じて疑わず。道、果たしてここにあり」と述懐したように、近世日本の儒教思想は、惺窩による仏教の否定に出発した。仏教を否定したのは、人と人との関わり、すなわち倫理道徳の価値を高く評価したことを意味している。日本人の精神的独立に資した儒教とは、朱子学の有する世俗的、倫理的側面であり、いかえれば、日本社会の世俗化に寄与し、社会の要求に応じて人倫を教えたという点に、儒教の日本的展開の姿を見出すことができるのである。儒教は、治国平天下の工夫を自己の内面に求める「心法の学」、それを行為の場に求める「徳行の学」、その行為を政治的行為に限ろうとする「経世済民の学」に類型化することができる。惺窩による儒教への傾注は「未発の心」(事物に接して動く前の心)を正すことであった。つまり「心法の学」としての儒教に高い価値を見出し、以後の日本における儒教解釈の立場を特色づけている。『經典餘師』も例外でなく、この系譜に位置づけられるものである。

置づけられるものである。

ひるがって二宮尊徳に眼を向けると、その偉大さは、ただ真理を分かり易く説明し、主張したというのではなく、その真理を実生活に生かして、封建制度のもとに喘ぐ農民を救い、その生活の安定を志向したという点にある。この意味において、尊徳の学問は、終始、実学の精神によって貫かれていたことができる。尊徳がその処世の標準としたのは、三教に一致する真理であったが、彼の実学の精神は、儒教(四書五経)によって触発され育まれたものである。つまり、尊徳は『經典餘師』を得て、儒教の真髓を身口意において実践する「餘師」(多くの師)としたのである。しかし、儒教のみをもって師としたのではなく、また儒教のすべてを師としたのではない。いかなれば『經典餘師』のなかに、三教に一致する精神と、他の二教にない儒教の真髓を感得したのである。尊徳は「心法の学」すなわち個人の内面的な修養に重きを置きつつ、「人倫日用の学」として儒教を受容しているといえよう。そこで本稿においては、尊徳の座右に置かれていた『經典餘師』を取り上げ、日本的儒教(日本人によって共感された儒教思想)の一端を述べることを主題とする。

## 二、『經典餘師』について

『經典餘師』は『国書総目録』によると漢百年(世尊)著、天明六年刊、十冊、四書とあり、また二十四卷二一十四冊ともある。それには五経のほかに『孝経』・『孫子』・『近思録』・『小学』・『朱子家訓』など、儒家の古典のみならず子書も名を連ねている。さらに「五経經典餘師」という書名も見えている。私の手元にあるのは、その内四書の十冊と易経の七冊のみである。

『經典餘師』については従来十分な解説もなく、本書巻頭に付されている「序」が唯一の手がかりである。そ

ここで、巻頭の記述を中心に本書の特質を見ていこう。

まず四書十冊の内、第一冊は『大学』であり、巻頭に天明丙午（天明六年、一七八六）の菅原胤長の序が付されておられ、以下のような内容である。

先王の道は経書中に説かれ、その道は極めて明らかなものであるが、人々が十分に知り、理解し得ないのはなぜであろうか。それは「善く読まない」からである。そして、「読みても善く読まざる所以のもの」は「その師匠を得ない」ためである。そこで古の学者は必ず師匠を択んでそれにつかえ、然るのちに日々その「いまだ知らざるところを知り、駁々としてもって進む（急速に進歩する）」ことができたのである。もし僻地に居て善き師を得ることをせずに学問をするならば、それはいたずらに歳月を浪費する事となってしまうであろう。

つまり読んだとしても「善く読む」ためには、その道に精通した「師」に就かなければならないというのである。このように学問を深めるにおいて「師」が不可欠であることをのべたのち、この師を得ることのできない人々の不遇をなげき、国字をもつて『論語』『孝経』などを解説し、それを『經典餘師』と名づけたと、刊行の主旨を述べている。彼は、学問に志そうとしている者は本書を読むことによって、たとえ僻地に住んでいたとしても「餘師」（多くの師）を得ることができると説いている。そして、高論（高遠な論）の無益、卑論（卑近な論）の有益を説いたのである。卑論とは日常茶飯の身近な言葉や教訓をいい、その中に儒教の実学の見出そうというのである。

続いて、溪世尊の自序ともいふべき「溪世尊頓首再拜して謹んで書を大納言菅原明公の台下に奉ず」という一文が付されている。この文を読むことによって著者の本書を著わした意図が知れる。

まず「師」を尊ぶべきことを述べるにあたって中国の古礼を引用している。儒教の礼によれば、朝廷にあつては「位を歴て相い共に言わず」ということが重んじられていたのであるが、中国の古代にあつては唐と平公、子思と繆公、子陵と光武などは、皆この礼を犯している。そして、亥唐・子思・子陵は共に臣の立場にありながら「事える」といわず「交わる」といい、また「臣」といわず「友」と称しているのはなぜであろうか、と問いかけている。これら三人は周知のように時の賢者であり、彼らの人格を尊ぶが故に、礼の定めを敢えて犯しているのであるというのである。要するに、その人の「徳」を友とした事実をとりあげ、時の君主たるものが、いかに学問のある賢者すなわち「師」を尊んだかを示唆しているのである。

以下、菅原公を称える言葉が連ねられているが、その後文において『經典餘師』を著わそうとした理由が述べられている。それによると、自分がかつて『天朝史鑑』を著わそうとしたが、いまだその業を終えることができず、その余暇に『經典餘師』二十五巻を著わした。それは「蒙士の学を為すの一助たらん」としたためであると、執筆の意図を述べている。次に、歴代の碩学の業績を紹介し、「近來、学問に対する志を有さないものが多くなってきたのはなぜか」と問い、それはそれぞれが次のような問題をはらんでいるためであるとしている。

まず「貴人の病むところのもの三つ、庶人の病むところのもの四つ」とし、「貴人の病むところのもの」とは、

一、君主たるものが、儒学に志すと、その出所進退に威厳がなければならず、そのためには自身の修養に努めるべきであるのに「采色を愛し、宴遊を事とする」ようになる。

二、明君に仕えるのは、暗君に仕えるように「易々たる」ものではない。そのため善からぬ臣下は敢えて儒学を勧めようとしぬ。

三、今の君主はたまたま儒士を登用しても、これを臣下に列し、その教誨するところを尊重せず、僅かでも

気に入らないところがあると、心を他の技芸に留めてしまふ。

これらの理由のため儒学が形骸化し、その精神が損なわれ、儒学そのものの真髓が発揮されていないと指摘している。これに対して「庶民の病むところのもの」とは、

一、庶民は、儒学をもって自分達の学ぶべきものではないとし、これを「茶香花画」と同様に「奢侈無用の物」として、ともに捨てて顧みない。

二、儒学は「三弦浄瑠璃」の「易く且つ楽しき」に及ばないと考えている。

三、幼少の頃に学んでいないので、長じて「下問を恥じる」傾向がある。

四、僅かに儒学を聞きかじり、自分だけが「覚者」として「仏に唾し人を罵り」、「家産を破り」、甚だしきは君主と父親を軽んじ、そのため父母はやむなく「禁錮」せざるを得なくなる。

以上が著者の指摘する「貴人」・「庶人」の病むところである。形式に流れた儒教、単に厳しい教訓としての儒教という枠を打破り、孔子の学・君子の学を伝え、たとえ学問に接する機会を失したものであっても、謙虚に学ぶことによって、その真髓を体することが出来ると説いている。また、学ぶということは、けっして自尊的・独善的になるのではなく、常に師について謙虚に倣い、学習を積んでいくことが肝心であり、また、そのことの楽しさを伝えようというのである。

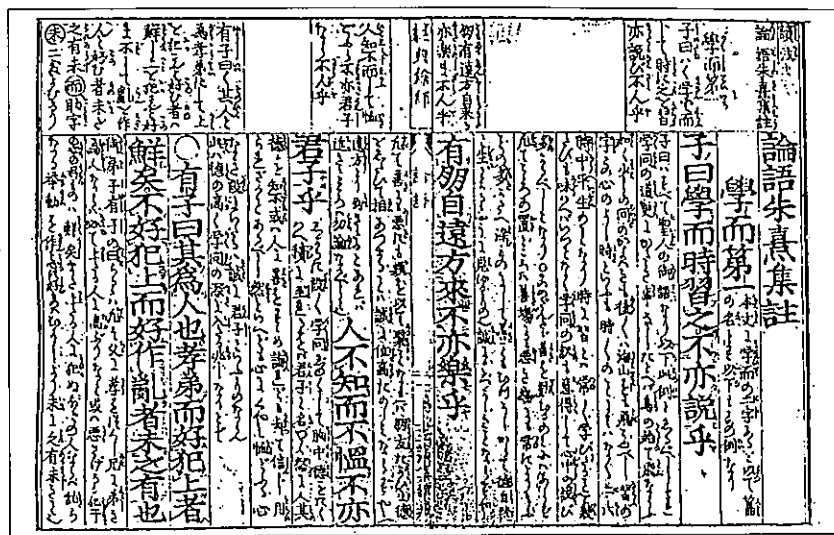
また表立つては儒学を廃し、ひとり密かに經典を学ぶものがあるが、これらの人は、心中できればしつかりとした人生の指針を得、それに私淑しようとしている。しかし、古典の本文が読みにくく、かつたやすく解釈できないので、「長大息」して自分かつてに解釈しようとする。このことは士庶をとわずに存在する通病である、という。

さらに、女子たるものははじめから儒学などには関与せず、その習うのは伊勢物語か源氏物語の類であり、これらはもとより日常の行動に役にたつものではないとも指摘している。このことは、これらの通弊を是正していくところに、『餘師』を著わす目的があり、貴庶男女を問わず日常生活の指針を呈示することに、本書刊行の意義があることを示している。要するに、本書は一にぎりの学者を対象として著わされたものではなく、一般大衆ことに教育の場に恵まれない有意の士に対して手をさしのべたものであるといえよう。

また「序」に続いて詳細な凡例が付されている。まず第一義として、冒頭に「聖人の道とは天下国家を治めるよりして一己の身と行いを修めるの道なり。人々日用の教えにして、貴賤長幼の学ばざるべからざるものなり」とある。「官学」、「治国の道」としての儒学を「人々日用の教え」であり、万人が学ぶべきものとするところに着者最大の眼目があるのである。

本書の「餘師」たる特色は、既に述べたように、僻地にいて師事する師匠もなく、学問を進める上での困難を感じている人々の便宜を図るという点にあったのだが、この凡例に、本書編纂にあたっての創意と工夫が示されている。

まず、第一に本文（經文）の読み方である。本文の上欄に「説法」の欄が設けられ、訓読が示されている（写真参照）。例えば、「無友不如己者」（『論語』学而）を「己に如不者を友とすること無」と書き換え、「如不者」の部分に「しかざるもの」と、また「無」には「なかれ」とルビをつけている。その訓は今日行なわれている書き下しではなく、原文に即して意味を汲むことが出来るように、独特の工夫が凝らされている。また「於」や「矣」などの文字に就いては、一々「助字」と説明を付している。第二に本文の構成である。返り点の付された經文と解説の二部から成り、解説は語釈と著者の解説ならびに問題の提起がなされている。とくに諄々と言い含めるよ



『經典餘師』天明六年刊

うな解説は、十分な学力がなくとも心得できるように配慮されている。その内容については後文にも論じることとして、それは朱子の「集注」を基礎とし、藤原惺窩の学統を引き継ぐものであることを指摘しておきたい。

三、『經典餘師』（『論語』）を読む

本節では『經典餘師』の特色を、『論語』を通して考察する。

「学び」の悦び

開卷第一の「学びて時にこれを習う」の章をとりあげてみよう。<sup>(1)</sup>この章は周知のように、外から学んだものを繰返して習うことによつて我が身に習熟していく、その心密かに噛み締めるような悦びを説いたものであり、孔子の思想に一貫する「学び」を尊ぶ精神を代表するものである。この言葉に対して著者は、まず「子曰」の二字をとりあげ、「子曰は、すべて聖人の御語なり」と述べ、また凡例に、「この書中に聖人とのみあるは文宣王孔子な

り」とある。儒教に関して多少なりとも関心にある人ならば「子」の解説などは自明のこととして説明など要しないであろうに、敢えて「聖人孔子」と解説を加えるところに、一般の人々、それも初めて儒教に接する人を対象とした配慮が窺われる。

続いて「学びて時にこれを習う、亦説ばしからずや」の「習う」を解して、「たとえば鳥の始めて飛びならう如く、少しの間のかよわきも後々は海山をも飛びこゆべし」とある。これは「集注」の「習、教飛也」という解説を踏まえたものであるが、「少しの」以下は筆者の言である。そして、この解説を踏まえて冒頭の第一句について次のように解説を加えている。まず「時にこれを習う」とは、「時々のことにはなく、二六時中、平生のことなり。時に習うとは常々学びとることを幾たびも味わえはいつとなく学問の訳も会得して、心中の悦び多かるべし」となり」と解説し、さらに続けて、「この語ただ善きを勧むるのみにあらず。凡てこころの置きどころは善き場にも悪しき場にも常によりそうことの多きほうへ染むものにして、善きこともむつかかりて徳自然と生まれるかのように見ゆる」と述べている。学ぶといふことの真の意味と、心中自ずから湧いてくる楽しみ、悦びの所在を平易に説いているのである。

第二句の「朋有り遠方より来たる、亦樂しからずや」については、字句の解説の後、「凡て善きも悪しきも類を以て聚まるものなれば、朋友たがい徳をしいて集まるとは、誠に位高たのしみならずや。遠方より朋来たることあれば、近きところよりもちろんなるべし」と述べている。「徳孤ならず、必ず隣あり」の精神である。儒教の古典を通して徳を積もうとする者に対して精神的な支えを与えるものといえよう。

第三句の「人知らずして慍みず、亦君子ならずや」については「しかるに段々学問じゆく（熟）、して胸中徳をたくわえ積むに至るをば君子と名づく。然るに人其の徳を知らず、或いは人に善きをもとめ、誨れども却って信

じ、用いられざることあるべし。然るといへども心にくやみ(悔やみ)恤(い)どおる心なき段にいたるは誠に君子と  
言うものならん。此れは徳の高く学問の深きに入る兆(きざ)しなるとぞ」と解説している。人徳というものはすぐさま  
外にあらわれ、人々の注目を集めるものではない。しかし、人の評価などに心を奪われることなく地道に努力す  
ることが、君子たるものの条件であると喝破している。この言葉は地方にいて、またたとえ都にいたとしても、  
充分な学力もなく、また学校への入学を許されない志ある青年に、「学ぶ」ということの真の意味と、その目的、  
さらにその楽しさを諄々と説いている。『餘師』をひもといた有意の人々に、大きな希望を与えるものであろう。

#### 好学の士

では、「学ぶ」にはどのようなことに気をつけなければならぬのであろうか。このことについては為政篇の「我  
十有五にして学に志し……」の言葉について「とかく人間の徳というは年を経て大徳成就すと知るべし。聖人す  
ら此のごとく七十の御年には心に思うこと何事にもそのまま行い……自然と人の手本となり、天地の矩を踏  
えず。人みな聖人は生知とて、生まれながらにして何を独り知ろうと心得よし。依ってかくのごとく御深切に説  
き、学問には執行の階級ありしを示したもう。ふかく味わうべし」と述べている。学問を志し、大成を望む青年  
に対して、決して成果を性急に求めることなく、段階を踏み、「年を経て」努力し続けて始めて進歩し、事を成就  
し得ることを説いているのである。今日にても充分に傾聴に値することばである。さらに雍也篇の「哀公問う、  
弟子孰れか学を好むと為す……」のくだりについては、周知のように孔子は顔回を挙げ、「怒りを選さず、過ちを  
式(かた)びせず」と応じている。『餘師』には「聖人(孔子)の御門人誰か学に疎(おろそ)かならんや。然るに一人を指している  
ことは深き心有りと知るべし」と述べ、学問を志すものに学問の本質を見失うことのないように、顔回を好学の

士とした孔子の「深き心」を味わうべしと注意を喚起している。

#### 学問と実践

また学問の進むにつれて知識が広くなり、またその深みも増していくのであるが、そこには知識に溺れてしま  
うという危険性がある。この点について雍也篇の「君子博く文を学び……」の条について、

君子はまず学びて博きを窮むべし。しかれども妄りに博く学んで文書に涉りてその肝要の約(しやく)なれば一つも  
益なく、かえって人に高ぶり誇るべし。故にこれを約(しやく)むるに礼をもつてするなり。かくの如く心をせめてこ  
そ聖人の道徳にも畔(ま)かざるべしとぞ。礼とは規矩の事にて、法なり。たとえば儒者国家の政道を論ずれども、  
帰って一家を治め己れが身を安んずる事なきと同じ。これ四子六経諸家の高き論を読み覚えても、我が身の  
分を知らず。自分生得になき知恵は如何ともなりがたきものなり。

と解説している。つまり顔回に象徴されるような実践を通して体得した知識をもって至上のものとし、実学の  
精神をうたい挙げていたのである。

『論語』に描かれた孔子は徹底した現実的な合理主義の持ち主であった。そこに実学の精神の基礎があるのだ  
が、その面目を示しているのは先進篇の「鬼神に事えんことを問う……」の条である。『餘師』においては、まず  
「鬼神とは我が祖先をいふ」と解説し、子路の「鬼神に事え、交わり、志の神靈に通ずるよう道のありや」という  
問いに対して、孔子は「いまだ人に事えず、いづくんぞ鬼に事えん」と答えているが、そのことばを次のように  
解説している。

凡そ人の道を尽して君父に事え奉りて忠孝の誠を尽すならば、祭るにも一念の誠によりて鬼神自ずから来格

するの理なり。生ける世に誠を尽し、事えること能わずば、いかで鬼神に事うることあらんや。

また「死を問う」について、孔子は「いまだ生を知らず、いづくぞ死を知らん」と応じているが、それを、生の理を知らずしていかで死の理を知るべけんや。人の世に生まれ出る所以の理を知らば、また死去する所以の理を求め知る。たとえば死すべき時にして死せざる時は、死するより甚だしき辱あるという生の理を知らず。

と解説している。学問が進むと靈魂や死後の世界の問題がおのずと立ちだかってくる。その不可知な世界へと迷い込み、徐々に学問本来の目的を見失っていくのが実情である。一概にそれ等を無意味だとして避けてしまふのではなく、「忠孝」の実践の延長に祖先の靈を敬う心が生じ、また生をまっとうしていくところに死の意味も自ずから明らかになっていくというのである。この「餘師」の解説は実的確である。ここに見られるような現実の社会への注目、学問を単に知識の範囲に止めることなく、実践と相まって、はじめて深まっていくものであるという考えを展開している。この点を強調しているところに「餘師」の重要な立場がある。

#### 向学の気概

さて、学に志すものは、たびたび誘惑や迷いに出くわすであろう。ましてや年若くして学問を志したならば、その迷いは大きく、それを乗り越えるには、そのたび毎に、一層向学の意思を確固たるものとしなければならぬ。「論語」の中には、「富貴、天にあり」として、あくまで人事を尽すことを説いているが、学への志は「道」への悟入であり、些事にとわれることなく、泰然として楽しむという境地にならなければならぬものであった。述而篇に「疎食を飯らい、水を飲み、臂を曲げてこれを枕とす。楽しみ亦たその中にあり」とあり、また「富に

して求むべくんば、しつべん執鞭の士といえども吾れ亦これを為さん。もし求むべからずんば吾が好む所に従わんとある<sup>(8)</sup>」。この条について「餘師」は次のように述べている。

とくこの世の中の惑いは禍福なり。富貴を貪るは人の俗情にて、多くはこれにあり。それよりして神仏の惑いを生じ、或いは神明を疑うものなり。官禄貧富禍福は始めより人の分限とて定まりあることなり。人力にて心を煩わすとも益なし。天地神明は常に万民を恵みたもうこと勿論なり。説きたもうようは、富貴な人力にて自由なるものならば、鞭をとる卑しき役を務むといえども吾れはこれを為すべし。もと人力の及ばざるにたとえ及ぶも求不可（求められぬ）ものと悟るひとあらば、その無益なることは外に捨てて、吾れ常に尊び好むところに従いて志を起すべし。好むところとは聖人の道を指している。

単なる文字学問に終始せず、聖人の道を自ら歩もうとする気概を持たなければならぬということ、実に諄々と言ひ含めるものではなからうか。さらに、学問に志したとしても、その成果は一朝にして成るものではなく、ここにも迷いが増大していく原因がある。このことは衛霊公篇の「教えありて類なし<sup>(9)</sup>」の条下に「人々元來は善心のみに生まることなり。君子は教えを施して本来の善心にかえらしむなり。これは善人、これは悪心ありとその類をすることなし」とあり、また陽貨篇の「性相い近く、習い相い遠し<sup>(10)</sup>」について、

性とは人の生まるるこの形をうくる始めなり。聖人も常人も同じ天地の正気をうくることにて、仁義の善徳をそなえあるものなり。かりそめに高下賢愚のあるごとくなれども、みな一樣なり。よって性は人々相い近しという。然れども人も年とりて見なれ、聞くなれて悪にも善にも赴くなり。これを慣れ習うというて、自然大いに段の違いて次第に遠ざかるよしなり。豈耻かしからんや。

と述べている。自ずから生じてくる迷い、それは自己の本来の「性」にたちもどることによって消えていくはず

である、という言葉は、ともすると自暴自棄に陥り挫折しそうになる青年学徒には大きな支えとなったであろう。また衛靈公篇の「人、よく道を弘む。道、人を弘むるに非ざるなり。」<sup>(11)</sup>については、「道ははずれて人というものならず。人の外に道のあるべきはずなく、人よく道理を心に悟り得ば、その徳弘く大なるなり。また人の性に仁義礼知の道そなわりあれど、それより人心を引きたつということなし。これ道より人を弘むるの理なり」と解説している。要するに自力をもって不断に努力を積み重ねることが出来るか否かが問題なのである。

#### 孔子の生き方

そこで、述而篇の「五十にして易を学ぶ……」<sup>(12)</sup>については「本文五十の文字は卒の字のあやまりなり」とし、つづいて次のように解説を加えている。「聖人といえども易は窮めやすからずとの事にや。この時聖人すでに七十近し（朱子の注による）。願わくば今より年数を経て、この道に心を尽し学ぶならば、たとえ知り得る能わずとも大なる過失無きようにまではあらんとぞ。今の世に僅かにふせざる物を計り知るなどの戯れをもって自己易に通ぜしと思ひ、これらの事に生産のことを定めもらわんとする愚者こそ実に易を汚すというものなり」と。これは『易』のみならず、すべての經典に通じるものであろう。

また同篇の「述べて作らず……」<sup>(13)</sup>については「道を称える者は私に作為なされしことにあらず。皆これ古え大聖の御方、天地の鬼神陰陽の道を法として制作ありしなり。吾今古えの道を『述べる』のみにて『自ら作らず』との御詞なり。いにしへの賢者に老彭といえる人は古えの道を尊び好みて聖人の道を世の中へ述べ伝えし人なり」とし、「黙してこれを識し、学んで厭わず、誠えて倦まず。何ぞ我に有りとせん哉（何ぞ我に有らんや）」と自負する孔子の言葉をとりあげて、「この三つの行、吾が如き何して有るべき徳ならずとなり」と解説している。祖述

することをもって自己の課題とし、また学習と教育をもって使命とする孔子の生き方は、真摯な求道者の姿としての、世の学生の範となり得るものである。

また、孔子の行動については「郷党篇」に散見するが、そのことについて「この篇（郷党篇）聖人の平生進退の周旋言語一々記し載せて、後世の法に備えるものなり。いまこの篇を読み、謹んでその形容を想い奉れば誠に御側に在りて親しく拝し奉るが如し。しかれども聖人ここに心を寄せてこの行いをなしたまうにはあらず。これ皆聖人大徳の餘光なり。深く味わうべきものなり」と述べている。孔子の自然な立ち居振舞いから、その出処進退の道を得ようというのである。そして、「孔子郷党に於いて恂々如たり……」<sup>(14)</sup>の条について「聖人父母の御家に在りて郷党にての交わりいつも謙卑遜順を肝要としたまいて、自らその大徳なるを隠したまいしなり」とし、また「席正しからざれば坐せず」<sup>(15)</sup>については「席上正しからざる時は座したまわず。誠に君子の心なり」としてある。また八佾篇の「祭るに在すがごとくす」<sup>(16)</sup>については「これ上も下も人間第一の儀にて知らざるべからざることなり」と解説している。このように、孔子の日常における一挙一動から、処世の法を得んとしているのである。これも実学を尊ぶ『餘師』の立場として出色のものである。

#### 仁とは本心の徳なり

さて、この実学の精神は述而篇の「四以て教う、文行忠信」<sup>(17)</sup>の条の解説に「聖人常にこの四ヶ条をもって教えたまう。まず聖賢の文を読むべし。身の行いを脩むべし。知と行の中、忠と信と最も心の本主たるをもつて、これを重んずべし」とあるように、「心の本主」の在り方が最も肝心であった。その在り方は「仁」と称される徳であることはいままでもない。そこで「仁」に関する『論語』のことばについての『餘師』の解説を見ていこう。



まず学而篇第二節「有子曰く」の条に「孝悌なる者はそれ仁の本たるか」とあるが、それに「仁とは本心の徳なり。徳を成なうはまず本を務めおこなうべし」と解説し、八佾篇の「人にして仁ならざれば……」<sup>(20)</sup>については「仁とは本心なり。梅桃の実を桃仁梅仁というも同義なり。人もし本心の徳なくして不仁ならば、義理作法の礼も相和親睦（あいやわらぎしたしむ）の樂もいかんともほどこしよの有るまじきなり」と述べている。「仁」とは決して外から来るものではなく、あくまで人間の「本心」として固有のものである。問題は、その本心をどのようすれば發揮できるかという点にある。

仁を為すことは己れが心にあり

このことについて、まず里仁篇の「不仁者はもつて久しく約に処るべからず、仁者は仁に安んじ……」<sup>(21)</sup>の条について「仁（者）とは本心の徳を我が物にして義理の場に心を安（おとし）つけてある人という。不仁者とは心の置き所をうしないたるなり」と「本心」の置きどころこそ問題であるとしている。そして、有名な「一以てこれを貫く、……夫子の道は忠恕のみ」<sup>(22)</sup>の条について「忠恕というは仁を工夫するの道なり。かよふのところは学者深く謹んでよくよく心を籠めてみるべし」と解説している。思いやりの心は、本心たる仁を發揮するための工夫の道なのである。そして、その工夫はあくまで自力にて為すべきであるとする。たとえば顔淵篇の「顔淵仁を問う」<sup>(23)</sup>の条について「顔淵仁を行う所以を問う。この段最も要道にして、重い場所なり。……仁を為すことは己れが心にありて、人に由ることわりなしとぞ」とし、さらに述而篇の「仁遠からんや」<sup>(24)</sup>について次のように述べている。

心は動きやすく散りやすし。人みな心をとりしむる事なく、欲に動くゆえに道理を踏むこと能わざるなり。

仁は本心の全徳なり。人これを求めること嘆きように思うなり。聖人のたまわく、仁の徳、何しに遠方にあるものとして求め難しとするや。我れ仁を求めんと欲せば、早速ここに出来るとぞ。

さらに孔子の啓発主義の教育について「慣せずんば啓せず……」<sup>(25)</sup>の項に「門人を教えるの道に、弾いて放さざるの法とて、たとえば弓を教えるに、まず弓を張り矢をはめ、身を正して心を持つまでは師の教えるところなり。的に向かいて機変を用いるは学ぶ者の手練にあるべし」というように、学生に学問に対して積極的に取り組む姿勢を説いている。つまり師の示した教えに従い、自ら実践に励んで始めて「仁」を体し得、そこに「実学」としての孔子の教えの生命が宿るのである。

#### 実学の精神

この実学という問題について、『二宮翁夜話』の中に次のような言葉が記されている。ある儒教の学者が「孟子は分かりやすいが、中庸は難しい」と言ったのに対して、自分は学問上のは十分には知り得ないが、現実の生活に即して考えるときには、かえって孟子は難しく、中庸は易しい。なぜならば、孟子の時代は世の中が混乱して、道を弁明したにすぎない。よって書物上の議論に勝つことをもって学問の道は足れりとする一般の儒学者は「己れの心に合う」が故に、分かり易いといっているのである。しかし、学問の本来の目的は、議論に勝つということにあるのではなく、「道をふみおこなう」という点にあるのである。孟子のように人を言い伏すことをもって聖人の道とするならば、その内容は容易に実践できるものではなく、聖人の道は極めて困難となる。しかし、『中庸』に説かれている道は「通常平易の道」であって、「一步より二歩三步」と順を踏んで実践する方法が述べられているのである。よって実際の生活に即して考える場合には「孟子は難しく、中庸は易しい」のであると。

以上『夜話』十一節の主旨であるが、また「学問は活用を尊ぶ、万巻の書を読むといえども、活用せざれば、用はなさぬなり」ともある(三十九節)。尊徳がどのような視点から儒教を捕らえていたかを的確に把握することができるであろう。さらに『大学』の「明德」の章について、明德を明らかにすることは「心の開拓」というとあり(五十九節)、「大道はたとえば水のごとし」とし、道は本来水が大地を潤すように世の中を潤沢にするものであるが、少しも大地を潤沢にすることは出来ない。この水となった経書の真理を溶かして水とし、世の中を潤すためには「胸中の温気」をもってしなければならぬ。世の中に学者が多くいるにもかかわらず、学問が実際の用をなさないのは、この温かい心がないからである(六十二節)。このように尊徳は実践する人々の心を問題としていたのである。このことは先に述べた『餘師』の著者が「仁」の条の解説において正にいわんとする所を、より具体的に、より身近な問題として展開したものと考えられる。

#### 四、まとめ

儒教の思想、とりわけ孔子の言葉は、尊徳の身口意に一貫する実践的要素の根底をなしている。その実践と結び付いているところにこそ『餘師』が強調する部分があり、また尊徳の事蹟が光を放ち、また近代日本の礎ともなりえた最大の理由がある。それは「学び」を喜びとし、心の中に「仁」の精神を培うこと<sup>つちか</sup>によって躍動するものであった。不断に学習し、努力し続ける金次郎の姿が人々の心を打ち、その報恩の精神が民衆の多大な支持を得たのも『經典餘師』を介して得た実学の精神と、そこに培われる「暖かい心」即ち「仁」の精神が体得されてきたからであったといえよう。『論語』泰伯篇に「仁もつて己れが任となす<sup>26</sup>」とあり、『餘師』に「人、本心の徳

を守ることは至って重きことならずや。何を道違しといふなれば、身老いて死するにいたるまで、操を堅く守るなり。まことに遠く久しきならずや。この段深く味わうべし」と解説している。仁の心を体得せんとして努力し続ける、このことこそ『經典餘師』の著者の意図する所であり、その故にこそ『餘師』が御用学問の枠を越えて、広く民衆の心を打ち、また有意の青年学徒の心の支えとなったのであろう。

一体、儒教は武家社会にあつては為政者の道として活用されたものであった。儒教が「治人」をもってその課題とする以上、それは正統な儒教解釈の一つである。しかし、民衆が儒教に接した時、それは「治人の学」としてではなく、一個の人間の生き方を示す「修己の学」という面が強調されるのは自然の勢いである。藤樹の「孝道」も、仁斎の「人倫日用常行の道」も、さらに明治の元田永孚の説く「人道大本の道」も、人としての普遍的な道を儒教に求めたものである。『經典餘師』の立場もまた一個の人として、いかに生きるべきかを説く点にあり、なによりも平易に誰にもわかり易く、かつ力強く説いている点に、それが永い間民衆に親しまれた所以がある。この事は、いかえれば、学問としての厳密性という点からは、多少の遜色はあるものの、民衆に受け入れられた事実から推して、『餘師』の解説は民衆における儒教理解の一端を示すものであり、その意味において儒教における普遍的側面を示唆するものと考えられる。

(1) 子の曰く、学びて時にこれを習う、亦た説ばしからずや(亦た説びざらんや)。朋有り、遠方より來たる、亦た樂しからずや(亦た樂しまざらんや)。人知らずして慍まず、亦た君子ならずや(君子ならざらんや)。(学而編) (一) は「餘師」の説み方

(2) 子の曰く、吾れ十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従つて矩を踰えず。(為政篇)

(3) 哀公問う。弟子孰か学を好むと為す。孔子對えて曰く、顔回なる者有り、学を好む。怒りを遷さず、過ちを貳びせず。不幸、短命にして死す。今は則ち亡し。未だ学を好むを聞かず。(雍也篇)

(4) 子の曰く、君子は博く文を學びて、之を約するに礼を以てす。亦た畔かさざるべきか。(雍也篇)

(5) 季路、鬼神に事えんことを問う。子の曰く、未だ人に事うることを能わず、焉ぞ鬼に事えん。敢えて死を問う。未だ生を知らず、焉ぞ死を知らん。(先進篇)

(6) 司馬牛、憂えて曰く、人皆な兄弟有り、我れ独り亡し。子夏が曰く、商これを聞く。死生、命有り。富貴、天

にあり。君子は敬して失なく、人と恭しくして礼有れば、四海の内は皆な兄弟なり。君子何ぞ兄弟なきを患えんや。(顔淵篇)

(7) 子の曰く、疏食を飯い、水を飲み、脰を曲げて之を枕とす。樂しみ亦たその中に在り。不義にして富み、且つ貴きは我に於いて浮雲の如し。(述而篇)

(8) 子の曰く、富にして求むべくんば、執鞭の士といえども、吾れ亦た之を為さん。如し求むべからずんば、吾が好むところに従わん。(述而篇)

(9) 子の曰く、教え有りて、類無し。(衛靈公篇)

(10) 子の曰く、性、相い近し、習えば、相い遠し。(陽貨篇)

(11) 子の曰く、人、能く道を弘む。道、人を弘むるに非ず。(衛靈公篇)

(12) 子の曰く、我れに数年を加え、五十にして以て易を學べば、以て大過無かるべし。(述而篇)

(13) 子の曰く、述べて作らず、信じて古えを好む。竊かに我が老彭に比す。(述而篇)

(14) 子の曰く、黙して之を識し、學びて厭わず、人も誨えて倦まず。何か我れに有らんや。(述而篇)

(15) 孔子、郷党に於いて恂々如たり。言うこと能わざるものに似たり。その宗廟・朝廷に在ますや、便々として言う。唯だ謹しめり。(郷党篇)

(16) 席正しからざれば、座せず。(郷党篇)

(17) 祭ること在于すが如くし(祭ること在于すが如し)。神を祭ること神在すが如くす(神を祭ること神在すが如し)。子の曰く、吾れ祭に与らざれば、祭らざるが如し。(八佾篇)

(18) 子、四を以て教う。文、行、忠、信。(述而篇)

(19) 有子曰く、その人と為りや孝弟(悌)にして、上を犯すを好む者は鮮し。上を犯すを好まずして乱を作すを好むものは、未だこれ有らざるなり。君子は本を務む。本立ちて道生ず。孝弟(悌)なるものは、それ仁の本か。(学而篇)

(20) 子の曰く、人にして仁ならざれば礼を如何。人にして仁ならざれば樂を如何。(八佾篇)

(21) 子の曰く、不仁者は以て久しく約に處るべからず。以て長く樂に處るべからず。仁者は仁に安んじ、知者は仁を利とす。(里仁篇)

(22) 子の曰く、參よ、吾が道は一以て之を貫く。曾子曰く、唯。子、出ず。門人問うて曰く、何の謂ぞや。曾子曰く夫子の道は忠恕のみ。(里仁篇)

(23) 顔淵、仁を問う。子の曰く、己れに克めて礼に復るを仁と為す(己れに克ちて礼に復るは仁を為すなり)。一日己れを克めて礼に復れば、天下仁に歸す。仁を為す

こと己れに由る、而して人に由らんや。顔淵曰く、請う、その目を問わん。子の曰く、礼に非ざれば視ること勿れ。礼に非ざれば聴くこと勿れ。礼に非ざれば言うこと勿れ。礼に非ざれば動くこと勿れ。顔淵曰く、回、不敏なりといえども、請う、斯の語を事とせん。(顔淵篇)

(24) 子の曰く、仁、遠からんや。我れ仁を欲すれば、斯に仁に至る。(述而篇)

(25) 子の曰く、憤せずんば啓せず、排せずんば発せず。一隅を挙げてこれに示し、三隅を以て反えらざれば、則ち復たせざるなり。(述而篇)

(26) 曾子曰く、士は以て弘毅ならざるべからず。任重くして道遠し。仁を以て己れが任と為す、亦た重からずや。死して後已む、亦た遠からずや。(泰伯篇)